

プログラム

オープニングスピーチ

日本アイ・ビー・エム株式会社 社長 大歳 卓麻

おはようございます。日本IBMの大歳でございます。
本日は、皆様ご多忙の折、また経済環境も厳しい中で、IBM環境シンポジウムにお集まりいただきまして、誠にありがとうございます。

開催地北九州市とIBMの深い縁

北九州市とIBMは縁が深く、ひとつは北九州を代表する企業である東陶機器様を通じてのものになります。日本で初めて米国IBMの会計機を使用していたのが森村グループの東陶機器様、当時の日本陶器様でした。米国IBMとしても日本でお使いいただくのは大変嬉しいことでしたが、万一故障した際に直せる人がいないと困ってしまうので出荷できずにいたところ、当時森村ブラザーズにおられニューヨークに駐在中だった水品浩氏がIBMの機械を勉強されたことにより、ようやく導入がかなったという経緯があります。

それから、もうひとつの深い縁は、新日本製鐵様です。1964年の東京オリンピックのシステムが日本初のオンライン・システムでしたが、それから3年後の1967年に当時の八幡製鐵様の君津製鉄所で、世界で初めて、製鉄所でのオンライン・システムが稼動しております。当社の最高顧問・椎名武雄が言っていますが、IBM生活の中で一番苦労した非常に大きな国家規模でのプロジェクトであり、最も思い出に残っているプロジェクトの一つだそうです。



トップのリーダーシップで世界の模範へ

北九州市は、環境問題に大変積極的に取り組んでおられます。現在開催中の北九州博覧祭2001でも環境が大きなテーマになっていますし「インパク」と呼ばれるインターネットの上での博覧会でも、北九州市主催で環境に関するディスカッションが行われています。インパクの他にも市のホームページでは北九州環境通信倶楽部というコーナーを常設し、市民の方々が環境に関する情報を書き込めるような場が公開されています。

ご存知のように、北九州では八幡製鐵所様の溶鉱炉が、ちょうど100年前の1901年に完成して、その後20世紀の日本の成長の原動力という役割を果たしてきました。しかし、1960年代に入り、いわゆる「公害」問題を抱える都市と見られるようになりました。そうした中、1963年に現在の北九州市が誕生し、公害の克服を最大の行政課題に据え、今では全国に先がけ公害克服に正面から取り組んだ都市として知られております。

歴代の市長様を始め、行政のトップの方々の非常に強いリーダーシップ、ならびに地元の企業や市民が一体になって公害の克服に取り組む「北九州方式」は、日本だけでなく世界の模範として認められるところとなりました。今回ご講演いただきます末吉市長様も、自ら先頭に立って資源循環型の環境未来都市エコタウンづくりを進めておられます。こうした環境未来都市、北九州市で今回のIBM環境シンポジウムを開催できることを、大変光栄に思います。IBM環境シンポジウムは、去年初めて東京で開催したのですが、ご参加いただきました皆様の評判も大変良かったこともあり、今年は是非北九州市で開催させていただきたいと思い、ようやく今日の日を迎えることができました。

環境に対する意識の変化と積極的対応の重要性

最近の環境に対する意識の変化、進歩は著しいものがあります。ある調査では、一般消費者の約7割が「値段が多少高くても環境にやさしい製品を買いたい」と答えていますし、ゴミ処理の有料化についても4割が「有料化はやむをえない」と答えています。政府もいわゆるグリーン購入法あるいは家電リサイクル法を含めて、環境配慮の施策を積極的に打ち出していますし、企業という単位で見ましても、国際環境規格ISO14001や環境会計への取り組みを強く意識していると言えます。これら環境への取り組みは、企業イメージを形成する重大な要素として各企業でも認識されていますが、これからは受け身ではなく、経営の問題として積極的に取り組んでいくということが非常に重要になってくると思います。

IBMの環境対応について

いくつかのポイントを述べますと、ひとつはグローバルに共通化した包括的な対応を行っていることです。具体的にはまずIBMの環境に対する基本理念を全世界の事業所あるいは社員に徹底しています。それから環境組織、環境マネジメント・システムを全世界共通にして対応しています。また、当然のことながら、過去の経験、特に失敗の経験を徹底的に活かすようにしています。一例をご紹介しますと、以前は薬液を地下タンクに埋蔵していましたが、万が一漏れた場合の環境への影響や対応を考慮し、薬液タンクをすべて地上に設置し、それでも漏れた場合のことを考えタンクの下にプールを作って万全を期すなどの対策を行なっています。また、私どもはITの会社ですから、そのITをフル活用して、世界中で起こった私ども自身の事象や対応を全世界どこからでも社員が検索して、見られるという、いわゆる知識の共有化、経験の共有化を体系的に行なっております。

「環境」と言いますとすぐ「リサイクル」に結びつけてしまいがちですが、そこにいく前にまず、絶対量を減らす「Reduce」があります。次は、1回使って古くなったものをもう1回使う「Reuse」。その後がリサイクルではないでしょうか。「Reduce」という観点で今私どもが取り組んでる課題は電力消費ピーク時の抑制です。これは、電力使用のピーク時間帯にはパソコンの使用電源がACから本体内のバッテリーに自動的に切り替わるようにして総電力使用量を抑制するという共同研究を電力会社と一緒にやっており、もうすぐ何らかのご報告ができるところまで来ています。これは総使用量を減らすという意味での「Reduce」の試みです。「Reuse」では、企業で新機種に更新される際に不用となるパソコンを寄贈していただき、IBMで再生、掃除をし、マイクロソフト様の方で新しいソフトウェアに入れ替え、学校をはじめとした非営利団体あるいは福祉団体に寄贈する活動も行っています。こちらでも東陶機器様ならびに新日鉄様にご協力いただいておりますし、再生に関してはご当地のソルネット様を始めとするいくつかの企業にもご協力をいただいております。それからリサイクルについては、パソコンの筐体の再生材とペットボトルの再生材を組み合わせまして傘を作りました。実は東レ様をお願いして一緒に作ったものですから、IBMと東レ様で「IT傘」と呼んでいます。また、事業所で発生します食堂の廃棄物も社内で処理し、肥料あるいは家畜の餌にして事業者に納めています。IBMは世界初のISO14001統合認証を取得しましたが、既に取得している開発、製造事業所から、さらに本社や営業系の事業所へと拡大して取得に向けて取り組んでいます。今年中に六本木の本社、箱崎、幕張、大阪、大阪南港の事業所でも取得をしようと全社を挙げて努力しています。

環境情報交流の場に

このシンポジウムには、大変ご協力いただいた北九州市の方々だけでなく、県外からもたくさんの方々にお越しいただいており、いかに環境に対する社会の関心が高まっているかということを実感しております。先ほども申し上げましたが、環境の問題はどの企業、自治体でも一部の担当者の仕事ということでは決してありません。トップが自ら引っ張っていくことで初めて効果を出せると考えております。今日は私どもIBMの取り組みをご紹介させていただくだけでなく、市長様のお話を始めとして各企業あるいは学校の方々の貴重なご意見をご紹介いただくとともに、ぜひ皆様方にも積極的にご参画いただいて、何か一つでも二つでも明日からの役に立つヒントをお持ち帰りいただければと考えております。